©風編集室

森一弘司教追悼

森一弘司教と悲愛の霊性

山根息吹

森司教と「風の家」をつないでくれた青年たち

「風の家」の私たちは、森司教の最晩年の言葉を預かることになった。その一つは、二〇二三年一月に行われた対談「遠藤周作の人生と作品の根底に流れているもの」であり、『風』一一四号に掲載された。もう一つは、二〇二三年三月に行われた座談会「遠藤周作の文学の魅力―共感する神」であり、その内容は本号の追悼特集の中に収録されている。

森司教は、「風の家」の運動に対して、深い理解と共感を持ってくださっていたが、具体的な活動や行事を共にすることはそれまでなかった。『風』の読者の中にも、森司教の著作などを読み、井上洋治神父の問題意識や霊性との深い共鳴を感じられていた方は少なくないと思うが、「風の家」がこのような形で最晩年の森司教と深く関わることができたことに驚かれてい

©風編集室

る方もいるかもしれない。そこでまず、このような森司教との対談やミサ・座談会がいかに実現したのかについて、簡単に経緯を説明させていただきたい。

森司教と私たちの間をつないでくれたのは、「風の家」の青年たちなのである。様々な葛藤や苦悩を抱えながら生きていたその青年たちは、井上神父の帰天後に伊藤幸史神父に出会い、その赴任先である糸魚川教会や創設されたばかりの「信州　風の家」に集ったメンバーである。本号の追悼特集に森司教の追悼文を執筆して下さった渡邊眞子さんや羽塚傑さんに私が最初に出会ったのは、お二人が伊藤神父を訪ねて糸魚川に来ていた時であり、伊藤神父が二人を紹介したいとズームをセッティングして下さった。その後、新たな出会いが重なり、伊藤神父を中心として二〇代の若者たちが集う小さな青年会が、「風の家」に生まれた。『風』（プネウマ）に掲載された、青年たち（横山優二さん、藤原友里恵さん、渡邊眞子さん、山本瑞樹さん）による「信州　風の家」・共働学舎の訪問体験記もご参照いただきたい。

その青年たちの多くは、東京で学んでいたり働いていたりしたため、伊藤神父は、東京で森司教に会うことを青年たちに勧められた。その一人である羽塚さんは、井上神父の著作を読んで深く共鳴し、その後継者である伊藤神父にいきなり電話して「風の家」と出会った青年であり、伊藤神父の紹介で森司教に出会い、二〇二三年四月に森司教から洗礼を受けた。このように、東京では森司教のもとに通い、休暇期間にて「信州　風の家」に集う青年たちの円いが自然と生まれていった。実に、このようなつながりがある中から、殊に渡邊眞子さんが中心的に準備してくださり、最晩年の森司教との二つの対談・座談会が実現したのである。

©風編集室

私自身は、「風の家」の創設時から、井上神父と活動を共にしてきた山根道公の長男として生まれ、井上神父には、幼い時から孫のようにかわいがっていただいた。私が大学に入学して神学の学びを始めた時には、井上神父のご体調がすでに悪く三鷹の老人ホームに入られていた。そのため、私が神学的な話を理解できるようになってから、井上神父の講座を直接聴いたり、質問したりすることはできなかった。井上神父が帰天されたのは、私が大学一年生の時であった。その時私の周りに同世代の青年はほとんどいなかったが、帰天後新たに井上神父の著作や伊藤神父との関係を通して「風の家」に集う青年たちの仲間に恵まれた深い喜びを、井上神父にお伝えしたくてたまらない。

私の場合は、その青年たちにつないでもらって、森司教と直接お話させていただくことができた。昨年の九月から一年間、研究のために英国に行くことになっており、森司教は、渡邊さん、羽塚さんと共に四人で小さな送別会を渡航直前にしてくださったが、私にとってはその場が、森司教とお会いした最後となった。私が海外に行くこともあって、ご自身のローマでの留学について思い出をたくさん話してくださった。

その日私が「司教様は、伊藤神父様と大変お親しいのですね」と口にした時、「うん、そうね。こうして青年たちを僕のところに送り込んで来るんだから、まあ信頼していただいているのかな」と、嬉しそうにはにかみながら答えられた。

『風』に掲載するために、遠藤周作生誕百周年の記念対談を父としていただけないか、森司教に依頼したのはその時であった。森司教は、少し考えられたあとで承諾してくださり、「た

©風編集室

だ最近ボケてきていて、どんとん人や本の名前が出てきにくくなっているから、対談をやるならなるべく早い方がいい」と言われた。今から考えてみると、癌のご病気の進行を考えられていて、私たちを心配させない言い方で、容態が悪化する前に対談を行いたいと言う旨を伝えてくださったのだろう。その対談の言葉は、私たちにたくされた遺言的なメッセージであると思われてならない。

また、森司教は、青年たちがその対談に同席することを希望され、その対談は、二〇二三年一月に実現した。さらに、森司教の方から、遠藤周作生誕百周年記念ミサと座談会を、真生会館で行いたいというお声かけがあり、同年三月に真生会館で行われた。その時私は英国にいて、その行事の様子を伝えてもらった。帰国したら森司教にご挨拶に伺いたいと願っていたが、帰国一週間前の九月二日に帰天の連絡を受け取った。

振り返ってみると、森司教とお会いした際、ご多忙な中、時間を作っていただいた限りは、著名な研究者に面談をしていただく時のように、自分の研究や問題意識を簡潔にお伝えして、自分を売り込まなければいけないというプレッシャーを感じていたように思う。しかし実際に森司教と対面した時、そのような努力が全く必要ないほど、一人の人間として受容されているという安心感を深く覚えた。私は、風編集室を代表して森司教にご協力のお願いに伺っているという意識があり、自らの弱さや苦悩を聴いていただくといった関係に入ることはなかったが、その時の森司教が深い受容をしてくださった安心感を今も忘れることがない。

©風編集室

共鳴し合う霊性――「悲愛」、「憐れみ」、「共感」

森司教が帰天され、様々な思い出を青年たちと分かち合う時を持つなかで、私は、青年たちを通して最晩年の森司教と「風の家」の出会いが生まれたことは、単なる偶然ではなく、そこに、霊性の響き合いがあると感じるようになった。つまり、井上神父と森司教が捉えるイエスの姿が、本質的に重なりあっていて、そのイエスに倣おうとする森司教と、井上神父の霊性を継ぐ伊藤神父の青年たちに対する関わりが、彼らの魂の渇望に応えるものであったのだと思う。

井上神父は、『聖書』がイエスの愛を伝えるために用いるギリシア語「アガペー」を「悲愛」と訳し、その「悲愛」の意味を、他者が「哀しみと孤独のうちに背負って来た痛みを受けとめ、その人の心をあるがままの姿において感じとめる」イエスの姿を通して説明している（『日本とイエスの顔』）。そのようなイエスの姿に倣って行こうとする悲愛の霊性は、井上神父がつくられた「「風の家」の祈り」の次の言葉に結晶している。

人々の弱さ、欠点、罪を裁くことなく、まずこれらを受け入れられた御子イエスの悲愛の心に、私たちの心を近づけて下さい。また御子イエスが、深い哀しみと痛みを背負って、重い人生を歩んでいた人たちの心を映しとり、受け入れ、友として生きられたように、私たちにも、そのような人々の心を映しとれる、友の心をお与え下さい。

実際に『日本とイエスの顔』で井上神父は、「他者をそのままの姿で受け止めることのでき

©風編集室

ないようになってしまった閉ざされた」人間の状態を、「キリスト教は原罪と呼んできた」と説明している。つまり、無自覚のうちに〝神々の如くならん〟として「己の我」を「絶対化」して他者を裁いてしまう「利己主義」の「汚れ」から清められ、他者の哀しみを「映しとれる」「悲愛の心」を求める求道こそが、井上神父の霊性であったと言える。

他方で、森司教は「スプランクニゾマイ（憐れみに突き動かされる）」という言葉によって福音書が伝えるイエスと父なる神の姿を次のように強調している。

「スプランクニゾマイ」という動詞に示される神は、人々の罪深さや未熟さ、身勝手さ、醜さを見ながら、それを軽蔑することも突き放すことも裁くこともしない。それどころか、そんな人間の姿に心を痛め、はらわたがえぐられるような思いに突き動かされて、人間の傍らに駆け寄ってくる神なのである。

このように森司教が伝える神の「憐れみ」は、「人々の弱さ、欠点、罪を裁くことなく、まずこれらを受け入れられた御子イエスの悲愛」（『「風の家」の祈り』）と根底から重なり合うことは、明らかであろう。この引用は、『教皇フランシスコ――教会の改革と現代世界への挑戦』において森司教が、教皇によって公布された「憐れみ（いつくしみ）の特別聖年」の意味を語る言葉である。

その著作で森司教は、教皇フランシスコに、「自分でも不思議と思えるほど、ぐいぐいとひ

©風編集室

きつけられてしまっている」と述べ、その言葉には、「日本社会における司牧の一端の責任を担う司祭・司教として生きてきた私の心に深く響いてきて、私の魂全体を揺り動かすような魅力」があると語っている。私は、この著作を読む時、森司教は、教皇フランシスコの精神を解説しながら、その教皇の姿に烈しい魂の共鳴を覚えずにはいられないご自身の司牧者としての生涯について語っているように思われるのである。

具体的に森司教は、教皇フランシスコには、「他の教皇たちから伝わってこない」「教会は人々のための存在であるという明確なメッセージ」があると述べた上で、その理由を次のように語っている。

それは、教皇が、司祭に叙階されてから常に司牧の前線に立って、経済的に貧しい人々やさまざまな事情からもがき苦しんでいる人々と肌を接するような形で生きてきたことと無縁ではない。そうした司牧体験から、教皇は、人間のもろさ、傷つきやすさに対する理解を深めると同時に、人々に対する共感能力を育ててきたに違いない。

私は、この引用における「教皇」という語を、その姿に魅かれてやまない「森司教」に置き換えて読むことできると思う。そうした時、この文章は、端的に森司教の生涯を物語る言葉になるように思われてならない。そして、その森司教の「共感」の心が、出会った青年たちの魂の渇きをいかに癒していったかについては、本特集に掲載されている羽塚さん、渡邊さんの追

©風編集室

悼文を読んでいただきたい。

井上神父は、近年は日本におけるキリスト教文化内開花の課題に取り組んだ思想家として紹介されることも多いが、その司牧者としての体験が、その思索を突き動かす問題意識の根底にあることが見落とされてはならない。実際に、井上神父の思索が、弱さや脆さを抱える一人一人に寄り添おうとした司牧体験といかに不可分であるかは、『余白の旅』や『遺稿集「南無アッバ」の祈り』において明瞭に読み取ることができる。

その意味で、井上神父の悲愛と森司教の憐れみ・共感との共鳴は、単に思想的次元においてではなく、その生き様と霊性の次元において見出されるのである。それゆえに、おのずと、井上神父（およびその後継者）と森司教に出会って救われた青年たちの円（まど）いが重なりあったのではないかと私には思われるのである。